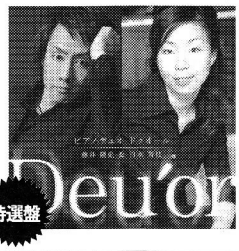
新譜月評 The Record Geijutsu 器楽曲

■Deu'or



〔①ルトスワフスキ:パガニーニの主題による変奏曲②ラヴェル:スペイン狂詩曲③シューベルト:幻想曲D.940④ラヴェル:ラ・ヴァルス〕
ピアノ・デュオ・ドゥオール〔藤井隆史, 白水芳枝(p)〕
[Studio N.A.T.ⒹNAT08401]
¥2800

濱田滋郎●*Jiro Hamada*

推薦 初登場のピアノ・デュオ、「ドゥオール」(オーラを放つ、ヨットのオールのような、皆のためのデュオ……といった意味合いを込めての命名とのこと、Deu'orと綴る)は、どちらも東京芸大卒の若い男女により2004年に留学先のドイツで結成されたという。ソリストとしてもそれぞれコンクール入賞歴を持つ2人だが、現在はデュオに専念しているようだ。

ピアノ・デュオというと、連弾からのイメージか、家庭音楽的におとなしい音楽づくりをつい思ってしまうが、このデュオは、そのような固定観念を小気味よく吹き飛ばしてくれる。冒頭のルトスワフスキ《パガニーニの主題による変奏曲》(ピアノ二重奏)は演奏時間約5分半の〝短篇〟ながらたいそう効果的に書かれた小傑作。「ドゥオール」はこれを非常に思い切りよく、鮮烈な効果と共に奏しており余すところがない。つづいて連弾によるラヴェル《スペイン狂詩曲》(ちなみにこの曲はオーケストラ版より先に連弾曲として完成された)、また末尾にもラヴェル《ラ・ヴァルス》(作曲者自身によるピアノ二重奏版)が置かれるが、これらもまた、積極的な表現意欲をもって、ただし奔放さが過ぎぬよう、洗練された美意識をも併せ示しながら弾き抜いた快演である。同じことは、シューベルトの美しい《幻想曲》ヘ短調(連弾曲)に関しても言えよう。プリマ(いずれか記載されていないようだが白水芳枝?)のタッチは輝きと潤いをおびており、支えるセコンダ(藤井隆史?)もつねに音楽的である。この調子で今後も目ざましい成果を顕わしつづけてくれそうな、じつに楽しみなデュオだと思う。

那須田務●*Tsutomu Nasuda*

推薦 藤井と白水はともに東京藝術大学卒業後、マンハイム音楽大学に留学。ソロおよびピアノ・デュオ科で学んで、2004年にドイツでデュオを結成し、以来、気鋭のピアノ・デュオとして各方面で活躍しているという。昨今のデュオのアルバムでは群を抜く出来栄えである。1曲目のルトスワフスキの《パガニーニの主題による変奏曲》(2台ピアノ)が驚きの演奏である。一貫して強いテンションが保たれ、見通しのよい構成感の中に息もつかせない鮮やかなパッセージ・ワークが繰り広げられる。タッチは入念に磨かれ、その上、二人ともよく似ているのでどちらの音か俄かに判別できないくらいだ。この1曲で推薦の手応え十分だが、その予感は続くラヴェルやシューベルトでも裏切られなかった。ラヴェルの《スペイン狂詩曲》(4手)の〈夜への前奏曲〉の抑制された響きと表現が幻想的な詩情を醸しだす。〈マラゲーニャ〉のリズムは軽やかでありながら内的な力と律動感に溢れ、テクスチュアは明快で音色は多彩。驚嘆すべきソノリテのコントロールだ。〈ハバネラ〉も響きの作り方が面白く、とても新鮮だ。どの曲もラヴェルにふさわしい精度の高さが示されている。

1台4手のシューベルトの《幻想曲》も精妙かつ透明。各声部のバランスも良好。《ラ・ヴァルス》(2台ピアノ)も見事。立体的なテクスチュアとシンフォニックな響き、壮麗なダイナミズムの魅力に富んだ名演だ。

神崎一雄●*Kazuo Kanzaki*

[録音評] 床の響きをも収めたルトスワフスキの曲でのオンで捉えた〝躍動〟と〝迫力〟は意図的だろう。興味惹かれる収録である。対比して他の曲は概ねオーソドックスな収録を感じさせる。ピアノ・デュオは2台のピアノのセッティングやマイクのセッティングなど案外苦労させられるが、ここではのびやかで深いピアノの音と響きとを聴かせる。2008年4月、びわ湖ホールで収録。〈90〉